
悪意と敵意と殺意と、限りなく愛に近い恋

宛宮志貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪意と敵意と殺意と、限りなく愛に近い恋

【Nコード】

N6849Z

【作者名】

宛宮志貴

【あらすじ】

スクールカウンセラーのシナリの過去話。

ネガティブな感情を全てかき集めて構成されたかのような男に会い、受け流すことに失敗した、悪意と敵意と殺意。初めて同族に少しの好意を感じながらも、どこか歪んだシナリのぶっ壊れた人生の一部がさらに狂わされていく。

人からの悪意に、「受け流す」なんて方法があることすら知らなかったあの頃の私に、あの人の存在は強烈過ぎた。

その人は周りに「アイ」という名前で呼ばれる人間だった。

愛か、藍か……どんな字が当てはまるのかと常々疑問に思っていたが、その人、アイの存在自体を酷く恐れていた私に、まさか直接聞けるわけも無く。

しかも重度の人間嫌いだという事もあって、友人一人作れていない私に、誰かに訊いて確かめるなんて選択肢を選べるはずも無かった。

だからアイという名前がそもそも本名であるかすらわからない。ただアイは男だったから、なんだかやたら可愛らしい名前だと笑った覚えがある。

それとちよつと羨んだ。

私は堅く男らしい様な印象を与えてしまう名前を持っているから、その女の子みたいな名前を本の少しだけ羨んだ。

しかし今思えば、羨んだのは名前だけだとは思えない。

きつと私は、アイの全てが羨ましかったに違いない。

彼は、色で言うなら黒い人間だった。

それもすずりにたつぷり入った墨汁って感じの、艶のある変に水っぽい、揺れる黒さ。

悪意と敵意を全身から放つ、何処からどう見ても善人にはとても見えない人間。

初めてみかけた時、私は得意なはずの作り笑顔すら忘れてしまった。

周囲から詐欺師と呼ばれるくらいには嘘が上手いはずの私から、嘘を全てはぎ取ったアイ。

彼はいつも笑っていた。

人から笑顔をはぎ取って、無理やり自分の顔に縫いつけた様な笑顔　しかしその笑顔は、まるで心からのものであるかのような錯覚を与えてくる笑顔だった。

違和感を与えてくる癖に、自分を疑わせない。

一言二言交わしただけで、すぐにわかった。

この男は、私と同じ詐欺師であり、しかし私以上に詐欺師であると。

そして、私と同じ人間嫌いであり、しかし私以上に人間嫌いであると。

まさか仲良くなれるだなんて思うわけも無かったが、アイに興味を持っていたのは確かだった。

初めてみる、私以上の悪人、変人。

こんな人間、これから一生見る事は出来ないと思った。

だから私はアイに、二度目になる、魔法の言葉を言ってしまったのだろう。

「こんにちは」

アイは何も変わらず、私にも周りと同じ笑顔を向けた。

「ああ、こんにちは」

そして問題の日が訪れる。

アイと出会ってから3年目になる頃で、季節は冬だった。

まだ雪は降る気配も見せないが、冷たい風は今も充分冬であると、痛みをもって教えてきていた。

ちぎれそうな指をさすりながら、私は道を急いでいた。

アイと約束があったのだ。

この頃の私は、やはりアイを恐れてもいたが、同族として、同情もしていた。

アイと少しずつ話してしまつて、アイの事を少しでも知つてしまつて、私は同情してしまつていたのだ。

かわいいそうな人だな、と。

自分の偽り方しか知らないのだな、と。
もしかして私は奴に惚れてでもいたのだろうか。

……いや、全力で否定するけれど。

でもまあ、この時私はアイの為に急いでいた。

時間通りについた約束の場所は、ここらで一番大きな図書館の屋上だった。

図書館に屋上？　なんて不思議に思うかもしれないが、何でもこの図書館では「爽やか」というのが一番重要なテーマらしく、利用者が爽やかに読書できるようにと、特別に屋上を開放しているらしい。

閉館が近い所為か、屋上まではあまり人とすれ違わずつく事が出来た　人間嫌いは健在だ　。

しかも幸いというか、いやこれからの事を思い出すと不幸なことではないのだが、屋上に人はいなかった。

アイは私を見つけると、言った。

「あ、本当に来てくれたんだ」

「何だその言い方……約束ぐらい守るよ私は」「来てくれないかと思っただよ」アイは笑った。「シナリは俺の事、嫌いっぽかったし」

「まあ、好きではないよ」

「でしょ？」

「でも、感情と約束は関係ないよ。守らないといけない事は守らなといけないんだし」

私はアイがもたれるフェンスの近くまで歩み寄った。

アイは「それで話だけど」と切り出した　切り出し、私の体をとんと押した。

「え？」

疑問をぶつける暇もなく。

其処まで高くも無いフェンスを簡単に越えてしまう、体　。
とつさに手を突き出し、私はフェンスにぎりぎり捕まる。

だがそれがどんな効果を見せるわけもない　、放り出された

私の体は、依然フェンスの外側だった。

内側のアイは言った。

はつきりと覚えている。

この時、アイが笑顔を消していたからか。

それとも、それだけシヨックだったのか。

「俺、やっぱあんたは嫌いだ」

聞こえないふりをしたくなる言葉だった。

聞こえないふりをしたくなるような声だった。

それこそ、墨の様な声で。

同族だと一瞬でも思ってしまった。自分に似ていると思ってしまった人間にそう言われるのは、違うと分かってはいても、まるで自分にそう言われているようで。

辛かった。

別に私は大した人間でもないし、殺されたって文句を言えるような立場ではないと思っっているから、余程酷い理由がない限り文句は言わないと決めていた。

死体になつては喋れるわけもないが、しかしまあそれくらいには思っていたのだ。

自殺に巻き込まれようと、事故に遭おうと、病死しようとして、急に襲われて殺されようと、拷問にかけられようと、別に自分の事なんてどうでもいいから。

どうでもいいから、

どうでもよくて、

どうでもよかった。

別にそれくらい、そんな行為くらい、「余程の事」には入らなかった。

けれど。

それに妥当の理由がついてしまえば話は別だった。

「私が、嫌いだって……？」

なんだそれは。

なんだその理由は。

なんだその現実的すぎる、それでいて人を殺すのにぴったりすぎる、当てはまりすぎる言葉は　　！

「ばいばーい」

最後に聞こえたアイの声。

それからよく覚えていない。

でもまあいらぬ才チかもしれないが、結局私は生きていた。

ちなみに、現在その図書館は屋上の開放を禁止している。

ひどい営業妨害をってしまったものだ。

「……………」

「シナリ先生、こんにちは」

「……おや」

回想終了。

閑話休題だ。

声のした方を振り返ると、少年がたっていた。

この子はクラスでいじめを受けているらしく、こうして偶に私の元へ話をしに来る。

結構追い詰められているくせに笑顔であいさつするところは、どこかアイに似ていて気分はどこかもやもやとするのだが、それはもう清々しいくらい別の別人なので、大人として精神の向きを自在に操ろうではないか。

スクールカウンセラーとして生きる「私」と、あの頃の唯の間嫌いだつた「私」をごちゃ混ぜにしないようにしないと。

「また話を聞かせてもらうよ、アキ君」

パイプ椅子に腰かける笑顔の少年に、「私」は方向を定めるのだつた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6849z/>

悪意と敵意と殺意と、限りなく愛に近い恋

2011年12月22日23時52分発行